

外国語教育メディア学会 (LET) 第 92 回 (2018 年度秋季) 中部支部研究大会 プログラム

日時 2018 年 12 月 1 日 (土) 9:30-17:00

会場 名古屋工業大学
〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町
Tel: 052-732-2111

研究大会実行委員長 石川 有香 (名古屋工業大学)
副委員長 松浦千佳子 (名古屋工業大学)

主催 外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部
後援 愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会



問い合わせ先

外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部事務局

支部サイト (<https://www.letchubu.net>) の

「お問い合わせと原稿送信」からお問い合わせください

Twitter: @LETChubu

研究大会サイト: <http://bit.ly/LETC2018Fall>



日 程

9:30 受付 【2号館 1階ホール】
9:30 展示 【2号館 1階ホール】

10:00－10:10 開会式 【2号館 0211 教室】

司会： 松浦 千佳子（名古屋工業大学）

主催者挨拶： 高橋 美由紀（中部支部支部長）

開催校挨拶： 石川 有香（名古屋工業大学）

10:10－11:40 講演 【2号館 0211 教室】

司会・講師紹介：石川有香（名古屋工業大学）

講演講師 井佐原 均（豊橋技術科学大学）

「人工知能型機械翻訳にできること、できないこと」

将棋や碁などで人間に勝つようになった人工知能は人間の味方でしょうか、敵でしょうか？

50年以上に前に開発が始まった機械翻訳システムは、人間が作った翻訳規則を用いる手法、大規模コーパスから取り出した統計データを用いる手法と進んで、2016年末にはMicrosoftやGoogleがニューラル機械翻訳という新しい人工知能型の自動翻訳システムでのサービスを開始した。これらのシステムは、流暢さは完ぺきに近く、正確さも非常に高くなっていて、人間と同じ程度の翻訳が可能となっている。この講演では、ゲームに勝つことに比べて、言葉を理解することがコンピュータにとって難しい理由に触れて、人工知能型翻訳システムの現状をその長所と弱点を示しつつ解説する。また、コミュニケーションツールとしての機械翻訳の可能性に触れ、人間と機械翻訳が協調した多言語コミュニケーションのあり方を論ずる。

11:40－13:00 昼食

展示等ゆっくりご覧下さい。 【2号館 1階ホール】

11:50－12:20 ランチョンセミナー 【24号館 3階 2439 教室】

米国非営利教育団体 Educational Testing Service (ETS) が開発したライティングの指導ツール Criterion® (クライテリオン) のワークショップを行います。参加ご希望の方は、期日までに事前申し込みをお願いします。定員 50 名

申込締切 11月22日(木) 23:59

URL: <https://goo.gl/forms/qpFzeAadOIA7cn053>



13:00－15:15 研究発表・実践報告

(1)13:00－13:30 (2)13:35－14:05 (3)14:10－14:40 (4) 14:45-15:15

第1室 (2号館1階0211教室)

司会：宮崎 佳典 (静岡大学)

- (1) 対連合学習における学習方向の違いが語彙学習に与える効果 【研究発表】
寺井 雅人 (名古屋大学大学院)
- (2) 英単語並べ替え問題における解答中の動作履歴を用いた迷い検出－学習者の迷いと問題内チャンク情報に着目した試み 【研究発表】
米津 康香・宮崎 佳典・厨子 光政 (静岡大学) 法月 健 (静岡産業大学)
- (3) 文字提示の有無が Shadowing の効果に与える影響について－CALL 教材開発のための基礎的研究－ 【研究発表】
けい うん・杉浦 正利 (名古屋大学)
- (4) シャドーイング活動における偶発的コロケーション学習の検証 【研究発表】
古泉 隆 (名古屋大学)

第2室 (2号館2階0221教室)

司会：伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)

- (1) 英語授業におけるタスク・ベースの活動と発話のわかりやすさ 【実践報告】
江口 朗子 (愛知工科大学)
- (2) 母語パラフレーズ活動の教育効果に関する検討－機械翻訳の制限用語に学ぶ母語センテンスの構築 【実践報告】
辻 香代 (京都大学大学院)
- (3) 多肢選択式語彙サイズにおける「分かりません」の有効性－出題語彙レベルと学習者の習熟度の影響 【研究発表】
杉山 友希 (敦賀市立看護大学)
- (4) 学習者の聴解力を最大限に伸ばすための Web 教材の難易度に関する考察 【研究発表】
椎名 紀久子・森 明智 (名古屋外国語大学)

第3室 (2号館2階0222教室)

司会：Douglas Jarrell (名古屋女子大学)

- (1) The shared-L1 benefit: A comparison of comprehensibility by Chinese raters judging Chinese- and Japanese-accented speech 【研究発表】
三上 綾介 (名古屋大学大学院)
- (2) Cognitive process during self correction in L2 English oral production: Comparison between tasks with a high and a low cognitive demand 【研究発表】
小林 真実 (名古屋大学)
- (3) Natural Use of English in Japan 【実践報告】
早瀬 光秋 (三重大学)

15:25-16:55 シンポジウム

【2号館 0211 教室】

コーディネーター：中川右也（鈴鹿高校）

「ライティング指導の在り方
—授業に活かせるアイデアから評価方法まで—」

パネリスト：溝畑保之（大阪府立鳳高等学校）

原田貴之（愛知中学・高等学校）

富田一彦（代々木ゼミナール講師）

様々な校種のパネリストの講演から、これからのライティング指導の在り方を考察する。具体的には、これまでの和文英訳中心の指導からの脱却方法や外部試験対策、そして近年、教育現場において採り入れられつつあるアクティブ・ラーニングの観点からの授業実践などを検討していく。実際の授業に活用できる豊富なアイデアからフィードバックを含む、評価方法まで、豊富な内容を含む。後半では、フロアの参加者からの質問や提案を受け、発展的に議論していきたい。

17:15-19:15 懇親会

【2号館 11階ラウンジ】

司会：小島 ますみ（岐阜市立女子短期大学）

開催校挨拶：石川 有香（名古屋工業大学）

発表概要

第1室（2号館 1階 0211 教室）

(1) 対連合学習における学習方向の違いが語彙学習に与える効果

【研究発表】

寺井 雅人（名古屋大学大学院）

意図的語彙学習における対連合学習では、第二言語の形式から第一言語の意味を学習する受容的語彙学習（L2→L1）と第一言語の意味を見て第二言語の形式を学習する産出的語彙学習（L1→L2）の二種類の方向が存在する。Webb (2009)では、産出的語彙学習の方が語彙学習により効果的であることが報告されている。本研究では、日本人英語学習者 24 名を対象に、新出語彙の獲得に受容的語彙学習と産出的語彙学習のどちらがより効果的かを受容的語彙知識と産出的語彙知識という二側面から検証した。ウィルコクソンの順位和検定を用いて語彙テストの正答率と学習効率（正答率÷学習時間）を分析した結果、正答率（受容語彙テスト： $W = 69.5, p = .90$ ，産出語彙テスト： $W = 79.5, p = .68$ ），学習効率（受容語彙テスト： $W = 48, p = .18$ ，産出語彙テスト： $W = 47, p = .16$ ）ともに統計的に有意な差が見られなかった。よって、本研究では学習の方向による学習効果の違いを確認できなかった。

(2) 英単語並べ替え問題における解答中の動作履歴を用いた迷い検出—学習者の迷いと問題内チャンク情報に着目した試み

【研究発表】

米津 康香・宮崎 佳典・厨子 光政（静岡大学） 法月 健（静岡産業大学）

英単語並べ替え問題とは、提示された単語を並べ替えることで日本語文に対応する英文を作る問題である。紙面上でこの問題を解く場合、得られる情報は並べ替えを行った後の最終解答のみである。一方、我々が開発している Web アプリケーション上でこの問題を解いた場合には、マウスを用いて単語の並べ替えを行うため、マウスの軌跡を記録することで最終解答に至るまでの過程の情報も得ることが可能である。軌跡情報からは解答時間、移動距離、ドラッグ&ドロップ、単語のグループ化機能の使用回数等を得ることができる。また実験用に、並べ替えた英単語のうち迷った単語を解答直後に選択させる機能を同アプリケー

ションに組み込んでおり、これら一連のデータを元に学習者の迷いを明らかにする。本発表ではこれに加え、学習者の迷いと、英文の意味的なまとまりであるチャンク情報との関連性について分析を試みる。

(3) 文字提示の有無が Shadowing の効果に与える影響について—CALL 教材開発のための基礎的研究— 【研究発表】

けい うん・杉浦 正利 (名古屋大学)

リスニングやスピーキング力を高めるための指導法として Shadowing に関し数多くの研究や実践事例が報告されている。本研究は、Shadowing によりフレーズがどの程度記憶されるか、また、文字情報を提示することがその効果に影響するかを中国語母語英語学習者 42 名を対象に調査した。VOA の記事と音声をもとに Shadowing 教材を作成した。前半と後半（それぞれ約 1 分）とで文字の提示の有無を入れ替え、6 回の Shadowing を行った。教材に含まれる各フレーズの先頭 2 単語に続く部分を産出（口頭及び筆記）してもらい再生率を学習前後で測定した。3 要因混合分散分析の結果、交互作用はなく、文字提示の有無による差は見られなかった。遅延テストでの成績の降下と筆記による解答での成績優位性が観察された。発表では、アンケート結果と合わせて、学習者のレベルと教材の難しさ、練習方法への慣れ、そして解答方法の影響について議論し、CALL 教材開発に際して注意すべき点を考察する。

(4) シャドーイング活動における偶発的コロケーション学習の検証 【研究発表】

古泉 隆 (名古屋大学)

門田 (2015) では、多読や多聴と同様にシャドーイングを通して語彙や表現が内在化されるとしている。本研究では、英語のシャドーイング活動でコロケーションが偶発的にどの程度記憶されるかを実証的に検証した。実験では、参加した大学生にシャドーイング活動を計 10 日間（1 日約 30 分）行ってもらった。シャドーイングの各文章にはコロケーションが埋め込まれており、それらには事前調査（本実験とは異なる参加者による）で正答者がいなかったものを用いた。計 10 日間のシャドーイング活動終了後、事後テストとして、日本語訳をヒントに前述のコロケーションを筆記解答してもらった。結果は、平均で 15% 程度の正答率であった。また出現頻度による正答率を比較すると、シャドーイング文中に 1 回しか出現しないコロケーションよりも 2 回出現するコロケーションのほうが正答率が有意に高かった。加えて、TOEFL-ITP の点数で参加者を上位群と下位群に分けると、上位群のほうが有意に高い正答率であった。発表では、事後インタビューの結果もあわせて、シャドーイング活動を通してのコロケーション学習について議論する。

第 2 室 (2 号館 2 階 0221 教室)

(1) 英語授業におけるタスク・ベースの活動と発話のわかりやすさ 【実践報告】

江口朗子 (愛知工科大学)

発表者らは、タスク・ベースの活動を取り入れた英語授業において、絵描写タスクで「絵の中の重要な情報を英語で説明できるか」という観点でのタスク達成度によるスピーキング評価を行ってきた。明示的な発音指導はしなかったが、情報を正しく伝えるためにはわかりやすく話すスキルも必要になる。そこで、スピーキング指導の向上を目指して、Saito et al. (2015) の comprehensibility に基づき、江口・田村(2018)の初級レベルの大学生 58 名の口頭絵描写データについて「発話のわかりやすさ(聞き取りやすさ)」の 7 段階評価を試みた。評定の主観性を低減するために、評定者 4 名の予備評価により各自の評価基準を擦り合わせた後に、116 すべてのファイルを 3 名が評価した($\alpha = .87$)。評価の結果は、実践後に有意に向

上したタスク達成度と有意な相関が見られたが、実践の前後で大きな有意差は認められなかった。タスク活動における発話のわかりやすさに関する明示的指導の必要性が示唆されたといえる。

(2) 母語パラフレーズ活動の教育効果に関する検討—機械翻訳の制限用語に学ぶ母語センテンスの構築 【実践報告】

辻 香代 (京都大学大学院)

外国語レベルが初級・中級の学習者は、外国語テキストを構築する際、母語から外国語への直訳をライティング方略として用いる傾向にあり、一連の言語処理プロセスにおける「和文和訳 (母語パラフレーズ)」の重要性は高い。本取り組みでは、原言語のパラフレーズを効果的に行うため、機械翻訳のプリエディットで使用する制限言語 (CL: Controlled Language) に着目した。CL を基盤とした留意事項を作成し、それらに準拠したパラフレーズ活動が学生の学習成果に与える影響を調査した。具体的には、母語パラフレーズによる学生の学習認識の変化、及び、外国語テキストの局所的箇所的发展への影響について検証した。処置群と対照群を設定し、Web アンケート調査とテキスト分析において、両群の統計的な有意差があるのかどうかを検討するために t 検定を実施し、効果量を算出した。統計的分析の結果、処置群の学習成果が有意であったことが示された。学生は L2 センテンス構築の読みやすさに対する意識を高め、CL 留意事項の観点から、自らの伝えたい事を分かりやすく表現するための「学び」を進めてきたと捉えることができよう。

(3) 多肢選択式語彙サイズにおける「分かりません」の有効性—出題語彙レベルと学習者の習熟度の影響 【研究発表】

杉山 友希 (敦賀市立看護大学)

多肢選択式語彙サイズテストの過大評価(overestimate)の問題を解決する方法の一つに「分かりません」という選択肢を付与するという方法がある。先行研究では、当て推量を用いた正答の抑制に有効であると言われているが(e.g., Zhang, 2013), テストで出題された語の頻度レベルおよび学習者の習熟度の影響は考慮されていない。本研究では、多肢選択式語彙サイズテストにおいて、「分かりません」の付与による当て推量を用いた正答の抑制が、出題語彙のレベルと学習者の習熟度の影響を受けるかどうか検証した。日本人英語学習者 20 名を対象に、3 つのレベルから成る 2 種類の語彙サイズテスト(「分かりません」あり・なし)を実施し、各テストにおいて当て推量による正答数に差があるかどうかを比較した。その結果、「分かりません」を付与することで、5000 語・7000 語レベルのテストにおいて、熟達度が低い学習者の当て推量を用いた正答を抑制できることが明らかになった。

(4) 学習者の聴解力を最大限に伸ばすための Web 教材の難易度に関する考察 【研究発表】

椎名紀久子 (名古屋外国語大学) 森 明智 (名古屋外国語大学)

本研究は CALL 科目における Web 教材の難易度検証を目的とする。TOEIC (Total) スコアで難易度表示をしている教材 4 種 (A: 450 以上, B: 520 以上, C: 590 以上, D: 660 以上) を、1 期の学習開始時の TOEIC-IP スコアで割り振り、学期中には教材毎に異なる Unit テストを複数回実施して到達状況把握した。難易度分析のために、「A 教材学習者 (A 群)」と、「本来は A 群だがワンレベル上の B 教材を希望し、英語力は A 群と等質の学習者 (AB 群)」の Unit テストの平均値 (AB:74.6/A:71.1) を比較 (t 検定) した結果、難易度が高いはずの B 教材学習者 AB 群の平均値は A 群のそれよりも有意差 ($p = 0.024$) で高く、教材 B は教材 A よりも難易度が低いと判断した。他教材間 (B, C, D) の難易度についても同様の方法で分析と検定をした結果、難易度は A, B, C, D 順に高くなるのではなく、B, A, C=D の順

(C と D は同難易度) であることが判明した。今後の適切なレベル教材の割当において示唆に富む結果が得られたと考える。

第3室 (2号館2階0222教室) 3発表 司会: Douglas Jarrell (名古屋女子大学)

(1) The shared-L1 benefit: A comparison of comprehensibility by Chinese raters judging Chinese- and Japanese-accented speech 【研究発表】

三上 綾介 (名古屋大学大学院)

The purpose of this study is to explore the interlanguage speech intelligibility benefit as suggested by Bent and Bradlow (2003). According to this concept, second language speech is perceived as more intelligible for a listener if the speaker and the listener share their first language. To investigate the hypothesis, four Chinese learners of English listened to ninety spontaneous speech samples, obtained from 45 Japanese and 45 Chinese learners of English, and evaluated the comprehensibility (ease of understanding) of the speech tokens on 9-point scale (where 1 = easy to understand, 9 = difficult to understand). A Wilcoxon signed rank test showed that the Chinese listeners assigned significantly more lenient (easier-to-understand) judgments on Chinese speakers (Mean = 3.9, SD = 1.3, Median = 3.5) than Japanese ones (Mean = 4.9, SD = 1.6, Median = 5.3) ($V = 772.5, p < .001$). Further discussion will be made based on the results.

(2) Cognitive process during self correction in L2 English oral production: Comparison between tasks with a high and a low cognitive demand 【研究発表】

小林真実 (名古屋大学)

This study investigated how task difficulty affects cognitive process during self correction in L2 English oral production. English learners were given two direction-giving map tasks: one which requires a high cognitive process in generating message (Task High), and the other which requires a low cognitive process (Task Low). Each task was followed by a stimulated recall interview to determine which stage in the speech model (Levelt, 1989) the participants were engaged in when a self correction was observed. Their comments were categorized into four cognitive stages: conceptualization, lexical encoding, grammatical encoding, and phonological encoding. We hypothesized that Task High would induce more conceptualization than Task Low. The results indicated that there were no significant difference in the cognitive activities between Task High and Task Low. However, the participants focused on conceptual aspect more frequently than grammatical during Task High, while no difference in cognitive process was found in Task Low.

(3) Natural Use of English in Japan 【実践報告】

早瀬光秋 (三重大学)

Languages exist to be used. Honna (2003, p. 194) says, "English becomes significant when it is used." However, how is English used naturally just like Japanese is used in daily life in Japan? Students in Japan learn English, practice English, take tests in English, and use English rather limitedly in class, but in many cases they may not use it in their daily life. Therefore, I will explore the actual natural use of English in Japan. First, I will discuss the importance of natural use of English. Second, I will show actual situations of junior and senior high school. Third I will examine specific examples of natural use of English in Japan. Finally, I will argue extemporaneous use of English and look into more possibility of natural use of English in Japan.

賛助会員展示

チエル株式会社	https://www.chieru.co.jp/
電子システム株式会社	http://densys.jp
株式会社エル・インターフェース	http://www.supereigo.com
株式会社アルク	https://www.alc-education.co.jp/
リアリーイングリッシュ株式会社	https://www.reallyenglish.co.jp/
株式会社教育測定研究所	https://www.jiem.co.jp/

昼食

大学内のカフェテリアは営業しております（11：30～13：30）が、昼食をご持参されますことをお勧めいたします。

懇親会

- 時間： 17:15～19:15
- 参加費：一般会員 3,000 円、学生会員 2,500 円（飲み物代含む）
- 場所：名古屋工業大学 2 号館 11 階ラウンジ
- 参加されます方は、以下 URL の予約フォームより、11 月 22 日（木）までにお申し込みください。

URL: <https://goo.gl/forms/3OEe80zEzYWwiRIA2>

- 当日参加につきましては受付でご確認ください。
- 懇親会にご参加されます方は、2 号館 11 階へ集合してください。



その他の情報

荷物置き及び控え室は 2 号館 2 階 0223 講義室です。スーツケース等置いていただいて構いませんが、施錠・管理はされませんので、必ず貴重品はお持ちになってください。

大会会場アクセス

できるだけ公共交通機関をご利用ください。 <https://www.nitech.ac.jp/access/index.html>

JR 東海中央本線 鶴舞駅下車（名大病院口から東へ約 400m）

地下鉄鶴舞線 鶴舞駅下車（4 番出口から東へ約 500m）

桜通線 吹上駅下車（5 番出口から西へ約 900m）

市バス 栄 18 名大病院下車（東へ約 200m）

昭和巡回 名大病院下車（東へ約 200m）

新規ご入会案内

LET 会員として入会手続きをしていただきますと、当日会員参加費分の金額が、年会費から割引されます。会員になられますと、LET 全国研究大会、支部研究大会（年 2 回）での研究発表、実践報告、紀要への投稿などをしていただくことができます。

- 当日会員参加費として 1,000 円をお支払い下さい。
- LET 本部サイトにて入会登録をしてください（仮会員）。
- 仮会員になられましたら、後日、年会費をご請求申し上げます（お支払いいただいた当日会員参加費 1,000 円を割引きます）。
- 年会費をお支払いいただきますと、正会員になります（3 ヶ月以内にお手続きをお願いします）。

会員登録、会員情報の更新はこちらから

LET 本部サイト：<https://www.j-let.org/>